オレの嫁？　うん、残念なことに今は自分

アスハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレの嫁？　うん、残念なことに今は自分

【Ｎコード】
Ｎ４４９１Ｘ

【作者名】
アスハ

【あらすじ】
気づいたら、高町さんちのなのはさん（オレの嫁）として生まれちゃってました。
あれ？　確かに前世では「死んだらなのはの世界に生まれたい！」って言ってたけど、こんなの望んでないよっ？！
こんなのってないよ…。自分の嫁といちゃいちゃできないよ…。
こうなったら、第二の人生と割り切って生きるんだ！！
目指すは翠屋の二代目なの！
……あれ？　このフェレットはなんでこっちを……え？　フェレッ

トからは逃げられない？

え？　え？

ぷろろーぐと一回目の決意（前書き）

亀更新予定。
たぶん、掘り尽くされたジャンルだろうから被るかも。
その時には連絡ください。

基本、気分転換ですので、投稿速度にバラツキあり

ぷろろーぐと一回目の決意

Q、質問です。あなたには『オレの嫁』といえる存在がありますか？

A、はい、いますとも！

Q、では、あなたの『オレの嫁』と言える存在は具体的に言うとどなたですか？

A、それはもちろん、みんなの心の魔王様！　『高町なのは』さんに決まってますよ！

Q、その回答に間違いはありませんね？

A、当たり前です！

……。

……。

……。

もしも、だよ？

あなたが死んで生まれ変わったのちに天国があったとする。

それが、例えば生前の望みの世界であったとする。

それで、あなたは幸せですか？

残念ながら、私の答えはノーなのです。

「ふふふ……。
こんなのってないの……。
私は神様に嫌われてるのかな？
だったら、私もあなたのことなんて大っきらいなのっ！」

私は公園のジャングルジムの上に仁王立ちをし、山の向こうへ沈む夕日に向かって宣言する。

「世界は、こんなはずじゃなかったことばかりなのっ！！！」

高町なのは、５歳です。
実は、生前の記憶を持っています。

「あぁ、本当にどうしてこんなことになってるの……」

生前のわたしは……記憶が定かではないのですが、一つの強い思いを持って生きていました。
それは、『高町なのは』に一生を捧げる、というか何というか。
とりあえず、自分はアニメの中の存在の彼女の生き様に惚れてしまっていたのです。
愛しちゃったのです。彼女を。

で、私は生涯その想いを胸に生き、死んだのです。

どのように死んだかは、『高町なのは』以外の記憶があやふやなので思い出せません。

しかし、それでもわたしは彼女を想い続けて死にました。

次に生まれるなら、彼女が生き抜いた時代、彼女の側で生きたい、そう望みながら生涯を終えたのです。

その結果。

私の望みは叶いました。

叶ったのだけれども、それは私の望んだ天国じゃなかった。

「あ、ははは……。

どうして『私』が『彼女』として生まれちゃったの？」

左手で前髪をかき上げ、空を見上げる。

茜色の夕空が私の瞳に映り込む。

「これじゃ、『彼女』の生き様を見届けられないの……」

頬をツーと暖かいものが伝い落ちる。

あれほどまでに求めた夢のような世界なのに、なんて地獄のような世界なのだろう。

私というイレギュラーは、『本物の高町なのは』に出会えない。

それ以外の人物には出会えても、本当に望んだ彼女には会えないんだ。

「それでも、私は生きなきゃいけない。
……違う。二度目の命を無駄にしちゃダメなの」

例え、彼女に会えなくても、この存在、姿、口調は彼女のモノ。
そんな、『オレの嫁』という存在で、自殺や無様な体たらくを見せて良い訳がない。

だから、私はこの世界で生きていくつもりだ。
彼女の代わりに頑張って生きて見せようじゃないか。

「ふぁいと、おー」

誰もいない公園。
ジャングルジムの上での決意。

高町なのは一回目。
後の私はこう思った。
『考えがまだまだ青いバカでしたね』

一回目の私とあのフェレット

私が『嫁』として生まれてから8年経ちました。
えぇ、時間が過ぎさるのはあっと言う間なのです。

五歳の頃の決意を胸に、私は頑張って生きてきました。
魔法というものは全然取っ掛りも掴めず、現在の目標は翠屋の二代目ということで、お母さんの下でお菓子づくりの練習をして過ごしてます。
勉強は前世の知識を総動員して苦労せずに済むので、お菓子作りに集中できる……私はこの時ほど前世というものがあって良かったと思ったことはなかったの。

基本的に前世の気持ちや知識は、私に絶望しか与えて来なかった。
『オレの嫁』『オリジナル高町なのは』へのどうしようもないこの想い焦がれる気持ち。
アニメの中という設定でしかない人物たちの情報と目の前に生きる人たちとの齟齬。
子供の無邪気な感覚と、冷静に周囲を観察する感覚とのズレ。

そういったものと戦いながら今まで生きてきたけど、ついに私はお母さんからお店に並べるお菓子作成の手伝い許可が降りたのです！
お店に並べるものですよ！
つまりは、お客さんに売るもの！
なんて責任重大なものを小学生でしかない私に手伝いとはいえ許可をしてくれたものです。
これほど信頼してもらえるなんて、頬が緩んでしまっても仕方ないじゃないですか！

あぁ、なんて幸せなんだろう！

認められることの嬉しさとは如何程のものかと世界に知らしめたいよ！

「おーぃ、カムバックなのはー」

「そっとしてあげようよ、アリサちゃん。
トリップしてるなのはちゃんが戻ってくることなんて考えられれないよ」

「それも……そうね。
なのは、もうすぐ学校につくから忠告だけはしたからね」

「うん、わかってるよ、アリサちゃん。
あなたと私はお菓子とお菓子で作り、食べる関係であるってことは」

「わかってない、わかってない」

現在、私は学校へのバスに乗っている。
両脇にはアリサちゃんとすずかちゃんが座っているけど、この二人との関係はまた微妙なところ。

アリサちゃんとの出会いは、テストの高得点争いの結果意気投合……なんてことじゃなくて突っかかってきた彼女にチョップを決めて喧嘩になり、その場にいたすずかちゃんが巻き込まれ、プチっとキレたすずかちゃんによって喧嘩両成敗。
で、気づいたら一緒に行動してた。

むむむ、なにげに私は青春してたんだね。
でも、オリジナルのなのはちゃん、もといなのは様はもっとスマートに、かっこよく仲良くなっていたような？
まぁ、気にしない。

「そう言えばさ、今朝変な夢を見たのよ」

「変な夢？」

私越しにアリサちゃんとすずかちゃんがなにやら話しているけど、そんなことより今の私の頭の中は今日のお菓子制作の手伝いの手順確認で一杯だ。全然頭に入ってこない。

「なんか、モンスターが男の子を襲ってる夢でさ。
妙にリアルだったけど、うん、ありゃファンタジーね。
魔法陣とか、どこのゲームよ。
リアルなら呪文ひとつでなんか起こしてるわよね」

「うん、アリサちゃん。その違いがわたしにはわからない、かなぁ？」

まずは、手洗いからだよね。
指の間、手の甲、爪、手首を洗剤でよく洗って、髪の毛が混入しないようにまとめて。

「なのははどう思う？」

ん？
気づけば、二人がこちらを見てる。
え？　なにかあったの？

「……なのは。また人の話を聞いてなかったのね」

「え、あ、夢の話だよね？！　私は翠屋の二代目に決まってるよ？！」

「「……はぁ」」

あれ？
どうして二人してため息つくの？
しかも、「やっぱりなのははなのはよね」って視線はなに？

「あ、学校についた。
さっさと行こう、すずか。
なのははもう少し周りに注意を払いなさいよね」

呆れた顔をされて、私はたった一人置いて行かれました……。
やっぱり、なのは様とは違う私じゃ、二人と親友にはなりきれないのかな？

「むぅ、何がいけなかったの？」

とりあえず、バスから降りて二人を追いかける私。
そういえば、今朝はなんか夢を見たきがするけど、寝返りをうったせいでベッドから落ちちゃったんだよね。
一体どんな夢だったのか。
しかも、なのは様に重要な出来事がそろそろあったような気がしたんだけど、なんだっけ？
えーと、すずかちゃんちでお茶会をしてたら、将来のなのは様のお嫁さんと運命的な出会いをするのは覚えてるんだけど、あれれ？

「……まぁ、いっか。
きっと忘れてるってことは重要じゃないんだよ。
うん、そうに決まってるよ」

自分にそう言い聞かせて、わたしは駆ける。
あ、躓いた。

◆◆◆

そして、一日が過ぎて放課後。

「……え？　なに？」

塾へ向かう二人と一緒に下校してる時にそれは起こりました。

≪た、たすけて……≫

「誰かなにか言った？」

「え、なにも言ってないよ、アリサちゃん。
なのはちゃんも言ってないよね？」

「う、うん。私はなにも言ってないよ」

塾への近道という公園の林を抜けている途中。
私の耳？　に誰かが助けを求めている声が聞こえてきたのです。
これは幽霊？　むぅ、でも確か、なのは様は幽霊と対峙したこと

があった気がしたけど、林の中だったっけ？
　というか、アリサちゃんも聞こえてるようだし、これは誰かのいたずらなのかな？
≪助けて≫
「やっぱり！　こっちから聞こえる！」
「あ、ありさちゃん！」
　思考から現実に復帰すると、アリサちゃんが必死の形相で林の向こうに駆けていくところでした。
「もう、仕方ないね、アリサちゃんは」
　そう苦笑して私は彼女を追いかける。
　なんだかんだ言って、前世知識のある私は気持ち的にはみんなより大人な気分で生きていたりするのです。
　いわば保護者気分。
　そんな感じでアリサちゃんに追いつくと、アリサちゃんが真っ青な顔をして何かを抱えて震えている……。
「って、アリサちゃん？！」
　その尋常でない様子に私も駆け寄ると、アリサちゃんの胸に抱かれたイタチ？　フェレット？　がぐったりした様子で動かない。
　なんだ、アリサちゃんは無事なんだね。焦っちゃったよ。
「心配させないでよ、アリサちゃん」

ふぅ、と額を拭っていると、アリサちゃんは震える手でケータイを操作して動物病院に連絡を入れていた。
あ、その弱肉強食の掟通りに運命を受け入れていた子を助けるんだ。
優しいんだね、アリサちゃん。
「というか、どうしてあんたはそんな平然としていられるのよ！」
「え？　だってイタチって害獣じゃないの？」
お兄ちゃんがそう言ってた気がするけど、違うの？
その答えると、アリサちゃんは苦虫を潰したような表情で俯いてしまった。
私は特に気にせずに、フェレットを摘む。
「それにしても、なにが引っかかるんだろう？」
私はフェレットを見つめながら考えるけれど、答えが出ない。
う～む、『高町なのは』の重要事項にあったようななかったような？
……ダメなの。
復習できるようなジャンルの知識ならともかく、こう言った出来事は曖昧過ぎて思い出せない。
フェレットなんてなのは様の周りに常にいたから、フェレットで特別ななにかなんてあったかな？
考えているうちに、林から移動して動物病院へ。
院長先生によれば、珍種のフェレットらしい。
で、野生ではないようだということらしいです。

しかも、気づけばアリサちゃんとすずかちゃんの間ではこの子を預かる話になっていたの。
……しかも、「不安だけど、あんたのところしか預けらんないのよ。頼んだわよ！」って、私が預かることに。
あのぉ、これでも飲食店のお家なんですけど。
確かに住んでる場所とお店は違うけど、ちょっとペットは……はい、拒否権なんてないんですね。

一応、今晩は病院で預かってもらえるようなので、私はお母さんたちが拒否することを頼みに帰宅。
で、そのことを夕食の席で伝えると、呆気なくＯＫが出てしまった。

どうして？！
あんなにも真剣に断ってって目で訴えたのに？！

あまりにもショックだったのか、あまり夕食も喉を通らず、早々にベッドにダイブしました。
お母さんの料理人の誇りを信じてたのに。
害獣を家にあげることになるなんて、高町なのは一生の不覚です。

◆◆◆

≪誰か！　この声が聞こえますか？！≫

「う、うるさいの……」

夕食の後にベッドにダイブして、気持ちよく眠っていたところにガツンと頭に誰かの声が響きわたる。

しかも、この声ってどこかで聞いたことがあるような。

≪お願いします！　この声が聞こえたら助けてください！≫

「誰なの？　私のケータイの目覚ましの設定を変えたのは……」

そう言って、もぞもぞと手をのばしてケータイの電源をオフにする。

「これでやっと眠れるの……」

≪お願いします！≫

どうやら、原因はケータイではなかったみたいなの……。

はぁ、とため息をついて起き上がる。

薄暗い部屋。

窓の外から月の光が差し込んでくる。

その中で、音の発生源らしいものを探すも見つからない。

「どうなってるの？」

≪お願い、誰か、来て……≫

そういえば、なのは様の物語にもこんな出来事があったような気がするけど、あれって夢を見てからがスタートだったよね？

じゃぁ、これは似たようなもので、魔法の始まりの物語ではない？

「なんだ、焦って損したの」

眠い頭でクラクラする私は再びベッドにダイブする。

あぁ、自分の匂いがする布団ってどうしてこんなに安心するんだろう。

そんなことを考えながら布団にくるまって丸くなる。

≪あ、来てくれた！≫

あ、幻聴君も助けが来てくれたんだね。良かったね、こうして君は救われるんだ。

私も魔法の出会いに備えて夢を見なくちゃ。

≪え、そんな、どうして……

これは、ボクの、せい……≫

あれ？　なんか幻聴君の声が泣きそうなものに変わっちゃった？

≪う、うわぁあああああああっ！！！≫

「う、うるさっ」

頭の中に幻聴君の絶叫が響き渡る。

あ、あたまが割るよ……。

それを知ってか知らずか、幻聴君もとい絶叫君は私の頭のなかで暴れまくる。

しかも、「自分のせいだ」ってずっと自分を責めている。
自分を責めるのも良いけど、他人の迷惑になることだけはやめてほしいの。

――ドンッ

「う、ぇ。なんの音？」

気づくと、外からなにやら大きな音が聞こえてくる。
一体なにが――

――ガシャンッ

「ふぇ？」

ダンッと、背中から叩きつけられる。

「っう、あ」

何が起こったのか、わからない。
体中を駆け巡る痛みに目を閉じていた私は、うっすらと瞼を上げる。

最初に目に入ったのは自分の胸に刺さった大きなガラスの破片。
そこから、現実感のない赤いものが流れていた。

それに手を伸ばそうとするも、腕がうまく上がらない。
なにがあったんだろう。

それどころか、体が動かない。
私は壁際の床に横たわっているみたいで、視線をあげると窓側の壁一面が爆破でもされたみたいになくなっていた。
そんな視界の中で、何かが動く。
黒い、モンスター？
壊れた壁の向こうから、こっちを見つめる赤い瞳。
もやもやとした変な丸い体。
けれど、しっかりとした質量もあるみたいだ。
よくわからないけど、なんとなく思い出した。
オリジナルの高町なのはが最初に出会った危険な魔法的な何か。
それがこいつだったんだ。
「無事ですか？！」
そんなモンスターのスキをついてか、フェレットが壊れた壁の向こうからやってきた。
そういえば、この害獣は、なのは様の夢に出てきたんだっけ…。
ということは、この害獣の首に付いているのが――。
「れいじんぐ、はーと」
私は、動かない腕を無理やりのばそうとするけれど、うまくいかない。
壁に叩きつけられた時に、脊椎でもやられちゃったのかな？
「い、今、治療をします！」

私の視界の隅で、フェレットが魔法陣を展開する。
それで、私が助かるのだろうか？
たぶん、無理だと思う。
なんたって、胸に大きなガラスが刺さってるんだよ。

「カフッ」

喉のおくから血の味がするもの――というか、血がせり上がってきた。
あ、通りでさっきから呼吸がし辛いと思ったら。
肺が傷つけられちゃったんだね。

「あ、ははは……。
やっぱり、偽物は、バカだっ、たんだ、ね、なのはさん」

私は害獣のおかげで動くようになった様子の腕でレイジングハートに手を伸ばす。

「われ、しめいを、うけし、ものなり」

私の言葉に、害獣がこちらへ視線をよこす。
残念ながら、獣の表情なんてものは人間の私には読めそうにない。

「けいやくの、もと、そのちから、を、とき、はなて」

それでも、害獣がレイジングハートになにかを指示しているのはわかった。

「かぜはっ、そらにっ、ほしはっ、てんにっ」

呼吸がさらに続かなくなってきた。
それでも、私は口を止めない。止められない。
「そして、ふくつのこころはっ、この、むねにっ」
これが最後だ。
そう、これはただの役目。高町なのはとしての役割だ。
ただの脅迫観念に押されるように、私は云い切る！
「このてにっ、魔法をっ！」
胸の奥に、暖かいものを、感じられた。
それと同時に、視界の奥でモンスターが動く。
そして、私は口の中で呟いた。
『レイジングハート、セットアップ』

◆◆◆

真っ暗な世界をふわふわと漂う。
どこだろう、ここは。
そんな思考が頭を掠める。
でも、ここがどこだかわからない。
あやふやな記憶。

前世の記憶、さっきまでの記憶。
そうだ、私は高町なのはで、『高町なのは』の生き様に惚れた高町なのは。
そして、二度目の人生を生きている。

――違うっ、生きていただよっ！

「っ！！！」

がばっ、と自分の上にあったものを跳ね除けて起き上がる。
思い出した。
自分は、モンスターに襲われて致命傷を負ったんだ。
胸に刺さったガラス片。
それがありありと脳裏に浮かぶ。
体中から汗が吹き出す。

「く、はっ」

ぎゅっと自分の胸を押さえる。
力の限り、認めたくない現実から目を背けるために瞑っていた瞼を上げる。

「……ない」

けれど、目に映る自分の胸、パジャマ、そこには突き立てられたガラスも、傷もなかった。
それを認識して、安心のためかドッと汗が出てきた。
さっきのものとは違うもの。

「夢、なの？」
呟いた言葉。
「？」
あれ？　なんだか違和感が？
「あー」
……うん、なんだろう。
わからない。
わからないけど、とりあえず、そろそろ起きなきゃ。
いつものようにケータイをポケットに入れようと枕もとに手をのばす。
「あれ？　ない？
ベッドから落ちたかな？」
そう考えてベッドのしたを覗き込むも、目当てのケータイは見つからない。
「まぁ、いっか。
後で探そう」
そして、自分の部屋にも若干の違和感を感じるものの、洗面台へ向かうことにする。
妙に足が縺れるような気がする。
体がフラフラとバランスが取りづらい。

寝起きだから仕方ない、と理由を付けて階下に降り立つ。

「……ほんとうになんなんだろう？」

今日はなんだか変な気がする。
いつものキッチンからの音もしない。
道場からの、お兄ちゃんやお姉ちゃんの鍛錬の音もしない。
とっても静かな、静か過ぎる朝。

「まるで、お父さんが怪我をしてた時みたいなの」

なにを馬鹿なことを、とその考えを一笑に付すけれど、なにかもやもやした感覚が胸にある。
一体なんなのだろう。

原因がわからずも、顔を洗う目的のために足を進める。

……本当に、なにが起こっているのだろう。

そもそもの話。
前世の記憶がある、ということはありえないこと。
しかも、それが今の自分の未来に関わることなのだから、それは前世の記憶という側面と共に未来予知という別のありえないことに繋がる。
まぁ、本当のところは未来とは逆のベクトルへ進んでいた訳なのだが。
そんなありえないことだらけの人生を歩んでいると気づくまで、あと数秒だったりする。

高町なのは二回目。
混乱する頭で、寂しさと戦います。

一回目の私とあのフェレット（後書き）

早速感想をくれた方、ありがとうございます。
ただ、まだこのサイトの使い方になれていないので、この場で御礼を言わせてもらいます。

とりあえず、フェレットはこのなのはにとって死亡フラグという話でした。

二回目のジャングルジムと宣言行為（前書き）

キリが悪いと切ったらプロローグ並みの文章量になってしまった…
きっと、これからも文章量のバラツキが起こると思います。

二回目のジャングルジムと宣言行為

膝を抱えて、隅っこで震えていたい。
そんな気持ちになったことはありますか？
私は今、そんな気持ちです。

「……か～ら～す～、なぜなくの～」

ジャングルジムの上で器用に膝を抱えて夕焼けを見つめる私、高町なのは5歳です。
でも、中身はアニメのオリジナルな『高町なのは』に心を奪われた8歳の高町なのは、前世知識持ち。
そんな私の瞳は『どよ～ん』という擬音がぴったりなほど濁ってしまっていると思うのです。

「……神様なんて、死んじゃえばいいんだ」

神様に死の概念があるのかは定かではないけれど、怨み事の一つや二つ言いたくなる。

「なんで、5歳の頃に戻ってるの……」

昔見上げた夕焼けと変わらない空へ目を向けながら、私は今朝から起きている非常事態について考えを廻らせ直す。

自分が死ぬというショッキングな夢から覚め、顔を洗いに階下へ降りた私に訪れた不幸なこと。
それは、自分の記憶と合致しない日常だった。

昨日までと違う部屋の様子。
昨日までと違う家具の大きさ。
昨日までと違う家族の生活サイクル。

ありえないと叫びたかった。
嘘だと、お腹の底から宣言したかった。
でも、そんなことは現実が認めなかった。

――高町なのはは、過去に飛ばされた。

洗面台に映る自分の姿は、５歳の頃の小さな自分。
背丈の足りない自分用に置かれた台を使わなければならないこの体。
そして、誰もいない、たった一人だけ置き去りにされた、この家の様子。

新聞をひっくり返して、年を調べても。
自分の部屋にあるだろう、小学生に上がった時にもらったケータイを探しても。
そして、テーブルの上にあった手紙の存在を無視しても。

否定材料が見つからない。
見つけられなかった。

段々と暗くなっていく公園に、一人、私は座って空を仰ぐ。
こんな時間でも、家族は今頃病院か翠屋にいるだろうから、大丈夫。

「私は過去に飛ばされた。
それが事実なら、私はあの時死んだことになる」

そっと自分の胸に手を這わせる。
そこには、傷なんてない、きれいなまま胸がある。

「あと、三年。
なにもしなければ、私はまた死ぬのかな？」

あの夢では痛みを感じられなかったけれど、たぶん、あまりの痛みに脳が痛みをシャットアウトしてくれていたからなんだと思う。
そして、このまま何もせずに生きていけば、今度は脳内麻薬が出ずに苦しむかもしれない未来があるということだ。

「……昔にも思ったけど、神様はとことん私の幸せを潰すのが好きみたいなの」

オリジナルに会えない苦しみの次は、８歳で死ぬ運命です。
そして、死ぬと5歳の体でやり直しです。
ちなみにゴールはあるのだろうか？
いっそもう一度死ねば、これが繰り返されることだと証明できるのだろうけど。

「それって、自分の不幸を確定させるだけな気がするの」

うるうると涙が溢れそうな目元を拭う。
もしこれが、私が死ぬ度に『死の運命』から逃れられない人生をリスタートさせるものだったとしたら、うん、拷問だよ、それは。
それを自分で証明して、自分の絶望的な人生を認識してしまったら……。

――こころが壊れちゃうよ、きっと。

何度も繰り返される死、なんて。
地獄。
三年前に例えた地獄よりタチが悪い冗談だ。

死神の鎌が常に首元にそえられているなんてお断りなの。

だから、今生ではそれを証明しないために頑張って生き残る、それを目標にするっ！

「不屈の心はこの胸に。
高町なのは、がんばりますっ！」

ジャングルジムの上。
私は立ち上がって宣言する。

「絶対にっ、私は負けないのっ！」

おーっ！　と、空に向かって拳を突き出す。

「ママ、あの子何してるの？」

「しっ、そっとして置きなさいっ！
あの子にはあの子の事情があるんだから、絶対に聞いちゃだめだからねっ！」

……ふ、ふくつのこころはこのむねにあるんだよ。

先ほどとは違う涙が溢れてきたけれど。
冷静な部分が悶え苦しんでるけれど。

私はぜったいにまけません……。
うん、負けないの……。

二回目の寂しさと発散行為（前書き）

とりあえず、週一くらいで上げたいです。
無理かもだけど。

二回目の寂しさと発散行為

「やっぱり、誰もいないんだ」

あの公園から顔を真っ赤にして逃げ帰って来た私を迎え入れたのは、明かりのついていない我が家だった。

この時期はお父さんが大怪我をして入院していたのと翠屋の忙しさも相まって、この時間でも家には誰もいないなんてことは多々あった。

でも、やっぱりどこかでこんな『過去に戻ってきた』なんて非現実的な事象を否定したい気持ちが残っていたんだと思う。

きゅぅ、と胸が締め付けられるように痛んだ気がした。

「心の整理なんてそう簡単にできないよ。

前世の知識があるからって、8歳の……今は5歳だけど、小さな女の子に違いはないんだから」

冷静な大人っぽい部分がある。

だからって、そんな簡単に割り切れるような事柄でもない。

だから、少しくらい苦しいって表現しちゃってもいいよね？

……ひっく

我慢してた感情を止めずに、玄関の扉を開ける。

少し前までは帰ってくれば暖かく迎えてくれる家族がいた。

……ひっ、く

でも、今目の前にある現実は、誰も迎えてくれない、誰も待っていない、肌寒い事実だけ。

「なんで、ほんとうに、」

こんな目にあうのだろう……。

ごしごしと手の甲で涙でぐちゃぐちゃに顔を拭い続ける。

そんな状態でも、私はリビングに足を進める。

「……」

涙で歪む視界の中、真っ直ぐにテーブルに向かう。

そこにはお母さんからの手紙と、冷たい夕食だけがある。

手紙にはきっと、この頃毎日読んだあの文章が書いてあるのだろう。

そんなものに意味はないと破り捨てる。

「……っ」

頭の中では、この現状は仕方のないことだとわかってる。

お店を、家族を守るために頑張ってるのだとわかっている。

それでも、やっぱり、あんなことがあった後くらい、

「あまえっ、させてよっ……」

奥歯を噛み締めて、情けない泣き言を、これ以上言わせないようにする。

不安で心が塗り潰されても、それは言っちゃダメだ。

「っぅ」

自分は高町なのはなんだから、無様な姿は見せちゃダメなんだ。

「ぅ、う」

ぎゅっと拳を握りしめる。

「そうだよ、私は高町なのは……。

オリジナルには劣っても、その存在を穢しちゃダメなの」

だから、この溢れるものを止めるんだっ！

こんな姿は見せちゃダメなの。

絶対にダメなの。

キッと目の前にあるご飯を睨む。

「やけ食い……やけ食いしてっ、寂しさなんてっ押しつぶしてやるのっ！！！」

そう口に出し、冷たくなったご飯を引っ掴んでキッチンに駆ける！

キッチンには私専用の台がしっかりあり、私はその上に上がって準備に取り掛かる。

「お菓子だけじゃないんだっ！

私には料理スキルがっ、お母さんに叩き込まれた料理スキルがあるんだっ！

これがお母さんとの絆なんだっ！！！」

しっかりと手を洗い、エプロンを身に纏い、置いていかれた料理を温もりあるものに進化させるために思考を巡らす。
泣き虫な私がいるなら、お母さんから受け継いだ絆でニコニコにさせてやるっ！
だから、泣くんじゃないっ！　私に泣き顔なんて似合わないんだっ！！！
「私はやれる子なんだぁあああっ！！！」

しばらくして。

「あむ」

とりあえず完成した料理を腹ペコで喚き立てるお腹の虫を黙らせるため、どんどん口に運び込むのだけれど、私の顔が笑顔になることはなかった。
憮然とした表情で私はテーブルの上を眺める。
そして、盛大なため息が漏れてしまうのは止められない。
むしろ、自分からため息をついてやる。
「調子に乗りすぎたの……」
テーブルの上を占領する料理の数々。
ストレス発散のために作り過ぎてしまった量は、うん、一人分じ

ゃなく家族で食べる量だった。

「これ、本当にどうしよう」

偉い人は若いうちは買ってでも苦労をしろと言ったらしい。
でも、5歳の私の胃の容量は根性論では語れない次元にあるのですよ。

「……」

もちろん、捨てるなんて選択肢はありえない。
全く、馬鹿なことをしてしまった自分を叱ってやりたい。

そんなことを考えていると、玄関の方からガチャガチャと物音が聞こえてきた。

……あれ、もしかして、救世主？

「ただいまー、なのはー、ちゃんと留守番できてたー……って、なのはっ？！！」

そんな驚きの声を上げたのは私のお姉さま。
その反応は仕方ないと私も頷く。
リビングの扉を開けて、たった5歳の妹と、あるはずのない出来立てほやほやな夕飯があるのだから。
お姉ちゃんは翠屋から直行で帰宅してるはずだから、お母さんが作ったものでないとわかるはず。

「おかえり、おねえちゃん」

だけど、そんなことは私に関係はないの。
救世主（お姉ちゃん）到来に私の顔に今日初めての笑顔が浮かぶ。
「あ、ただいまー……って、違うよっ？！！
これどうしたのっ？！！」
「作った」
「いや、作ったって……」
頬をヒクつかせて料理を指さすお姉ちゃんに、「どうぞー」とひと皿差し出す。
昔の人は言いました。
肉ジャガは家庭の味と。
だから私も姉にそれを勧めるのです。
お姉ちゃんは対応に困った様子だったけど、箸を取り、一口含む。
「……しかも、私が作るのよりおいしいなんて」
虚ろな笑いをするお姉ちゃんだったけど、そんなことは気にしないの。
さぁ、残飯処理（？）は年長者の務めなの。
がんばってお姉ちゃん。
「5歳児に料理で負けた……」
煤けた様子の姉には構わず、問題が解決したことに笑みが止まらない私だった。

◆◆◆

「はふぅ……」

ぽふっ、と私はベッドの上に置いてあるクッションに倒れ込む。

なんか、今日は本当に疲れた……。

お風呂上がり特有の倦怠感に身を包まれながら、私はベッドの上で寝転がった。

「タイムスリップか、正体はわからないけど、それを味わって……腹いせに食事を作って」

心の疲れはたっぷりあるはずだよね。

「んっ」

軽く伸びをして、ふにゃぁと全身の体重をベッドに預けるように俯せになる。

あ、下の階からお姉ちゃんの悲鳴が聞こえてきた。

体重のことを気にするなんて、育ち盛りなんだから無視して食べればいいのに。

まぁ、そんなことは置いておいて。

「……私、これからどうしよう」

近くにあった大きな白いウサギのぬいぐるみに手を伸ばし、それを胸に抱きかかえる。

そのウサギの頭に顎をのせて、考えることはこれからのこと。

どうすれば、私は死なずに生き残れるか。

その一点に尽きるんだ。

死ぬ前の人生、仮に『一回目の私』と呼ぶことにするあの生での死因は、たぶんあのフェレットだと思う。

もう靄の向こうに消え去った前世知識では、フェレットとなのは様の出会いがあった気もするのだけど、今では思い出せない。

ただ、うっすらと思い出せることは死亡フラグらしきものなんてなくて、結構記憶にも留めないほどあっさりこの問題をスルーしていたことなんだ。

これは……中々解決できそうにない。

「普通にこなせることができない。

そういったことの解決策ほど難しいことはないと思うの」

ウサギの脇に手を差し込んで、高い高いをするように持ち上げる。

そのウサギの赤い瞳に映る私が私を見つめてくる。

「オリジナルに遠く及ばないとは思ってたけど、これは結構大変過ぎだよ」

なんにでも真っ直ぐ突き進むあの魔法少女。

問題という壁も、全力全開で、もとい全力全壊で破壊するあのカッコイイ魔王様。

「私に、彼女と同じことができるといいんだけどね」

ウサギの瞳の中で、私が苦笑した。

後日知ったことなのだけれど。
一回目の私の時に魔法の力に目覚めてしまったせいなのか、二回目の私はレイジングハートなしに魔法の力を目覚めさせてしまったみたいで……転ばなくなりました。
うん、話が繋がらないと思うんだけど、それくらいしか原因がわからないの。

一応、オリジナルのなのは様よりハイスペックになってる……はずだけど。

なんでかな、嫌な予感しかしないんだ……。
どうしてだろう？

術式を知らないから、シューターすら出せない私がそういった機関に狙われるはずはないのに、寒気がするの。

とりあえず言えることは

『オリジナルより不運っぽいの……』

神様なんて大嫌い。
それが口癖になりそうな二回目の私です。

二回目の寂しさと発散行為（後書き）

文章力がほしいです。
きっと、そう思ってるのは自分だけではないはず……。

駄作だけど、感想とかくれると悪い点を克服する道標になると思うのでよろしくお願いします。

二回目の躓きと逃走行為（前書き）

文章の構成がどんどん劣化の一途を辿る…。
時間のある時を縫ってやってるから、少し目を瞑ってください…。

二回目の躓きと逃走行為

過去にやってきてから何日か過ぎました。
まぁ、あれですね。
『前回よりハイスペックになってたとしても、物事がうまく行くとは限らない』
うん、これがしっくり来るね！

「……ぅ」

はい、高町なのは、５歳です。

「はぁ……」

もうすぐ６歳の誕生日を迎える私ですが。

「今日も見に来てるよ……」

そう口に出してしまうほど兄と姉に呆れてしまっています。

いつもの公園、ジャングルジムの上。
暇な時や考え事をする時にやってくる場所と化しているこのジャングルジム。
そこで魔力を扱えるようになった私は逆立ちしたり、宙返りしたりとアクロバットな遊びをしながら、公園の茂みや木々の影にいる彼らを監視する。

最近、身体能力のブーストが感覚ができるようになってきたので、なんかすごい幼児になってる気がするけど気にしたら負け。
で、一応そのブーストのおかげか、なんとなく気配なるものを察知できるようになってたり。

そして、兄や姉の異常行動に気づいてしまったわけでして。

「毎日飽きもせず妹を尾行する兄と姉……変態さんだよ」

家族の知ってはいけない性癖を知ってしまったのですよ。

おそらくだけど、この行動に至った原因は私にあると思うのです。
過去にやってきた私は、ストレス発散のために5歳児には到底作れないであろう料理を『誰にも教わらずに』作ってしまった。
この件について問い詰められた私は、苦し紛れの嘘で「近所のお姉さんに教わったの…」とか言ってしまい、そこからその人物の特定やらなんたらと兄や姉がぴりぴりしながら迫ってくる。
なんだっけ？
最初は御礼をしなくてはと言う話が、私のぼろが出る度に、その『教えた人物』が胡散臭い人になっていったんだっけかな？
初めて会った人で、料理を教えようと近づいてきて自らの家に上げ、またいつか機会があったら教えてあげるという約束を交わして去っていった設定？

……いろいろ無理があるね。

とりあえずそういった経緯を経て、私の異常行動を訝しみながらも「実は誘拐されかかった？」と不安になったみたいで、お父さんが退院してからはこの調子なのです。

というか、二人とも鍛錬はしなくていいのかな？
一回目でなんだかんだでずっと道場や山にこもってた記憶があるのだけど。
まぁ良いのだけれど。

「っと」

宙返りをして片手でジャングルジムの上に着地、そのまま逆立ちに以降すると、ちょうど夕方の五時を告げるエーデルワイスが町に流れた。
そろそろ、帰る時間……かなぁ？
私はそっと二人がいるであろう場所に視線を遣って、ため息をついてジャングルジムから飛び降りる。

過去にやってきた日に感じた不安感。
それはこのことだったのかなぁ……。

◆◆◆

「父さん、なのはを鍛えようと思う」

「……ふぇ？」

そんなことを父上に申し上げたのは最近変態行動をしまくっている兄君でした。
私は一瞬何を言い出したのか理解できなくて、お父さんが作ってくれたコーヒーを片手に持った状態で固まってしまったのでした。
夕飯も済ませたリビングで、お兄ちゃんがお父さんと真剣な顔つきで見つめ合う。
い、意味が分からないの……。
どこのお家でも似た食後のリラックスタイムに、なぜそんなにぴりぴりした空気を作り出してるのか。
そして、どうして私がそれに巻き込めれているのか。
「理由は？」
お父さんは言葉数少なく、ただ訊ねる。
「なのはが拐われかけた。そして、なのはには伸びしろがある」
簡潔な答えをありがとう、お兄ちゃん。
はい、自分の軽率な行動のせいですね。
確かに、あんなアクロバットな遊びをしてればそう思うよね。
あなたの妹は今にも泣きそうですよ。
コーヒーカップを持つ手がぷるぷる震えてしまう。
なぜってそれはもちろん、これから未来のことを考えてしまったからなのです。
一回目の時に見たトラウマになりかかった出来事があるのです。

それは、お兄ちゃんやお姉ちゃんが血反吐を吐きながらも自分を鍛えていた光景。
道場で何をしたのかわかんないけど、朝早くに立ち寄ったら口元から血をダラダラと零しながらも笑ってる二人を見てしまったのです。
あれは……どう見ても内蔵をやられてるでしょ？！
そ、その鍛錬を、この悪魔（兄）は私に課そうと言ってるんだよ？！
わ、私には立派なパティシエになって、翠屋の二代目店主になる、ゆ、夢があるのっ！！！
そんな恐怖剣術なんて学ぶ時間的余裕も肉体的な耐久力も精神的忍耐力もないのっ！！！
だから、姉君、そんなに何度も頷かないでっ！！！
そんなにこの間の残飯処理が嫌だったって言うのっ？！！
美味しかったはずなのにっ！！！
「お、お父さん……」
私はコーヒーをテーブルに置いて、お父さんの腕にしがみつく。
「なのは……」
視線が絡む。
お父さんの瞳には、私を心配する気持ちが見え隠れしている。
こ、これは、お父さんとしてはまだ心が揺れ動いているっ！！！
鍛錬させるのは忍びないと思っているみたいだ。なら、まだ挽回するチャンスはあるっ！！！

「お父さん、私は大丈夫だよっ！！！
何も心配しなくても良いんだよっ！！！」

大丈夫、誘拐なんてことは全てありえないから。
一回目の時もそんなことなかったし、悪魔の心配してることは私の出任せが根拠となってるだけだから。
心配しなくていいんだよ。

そう言った想いを視線に乗せて、お父さんを安心させるために優しく笑ってみせる。
これで、なにも不安なことは無いってわかったよねっ！！！

「なのは……そうか」

お父さんはそう言って、私の頭をぽんぽん叩く。
どうやら、私の想いが伝わったようで、何もかも悟ったような顔で頷いた。
それを見て、私は危機は去ったとふにゃぁと顔をほころばせる。

ふふふ、参ったか悪魔めっ！！！
私は恐怖剣術なんて学ばないのっ！！！
パティシエになるんだっ！！！
お嫁さんとか、そういったことは思ったりはしないけど、女の子らしい夢があるんだよっ！！！
それを邪魔なんてさせないんだっ！！！

オリジナルの不屈の心には劣るけど、この夢は絶対に叶えるんだよっ！！！

「わかった、なのはを鍛えよう」

「……ふぇ？」

え、なにを仰ってるのですか、お父様？
私には目の前にいる父が一体どんな思考の末、その判断に至ったのかわからない。
ただ、その決断が、その宣言が、私の思考をストップさせる。

「なのはがこんなにも望んでいるのなら、異論はない」

だからどうしてそうなってるのっ？！！
今の流れでは「なのはも心配ないって言ってるし、する必要ないだろ？」のパターンでしょっ？！！

え、え、えぇえええええっ？！！

「よし、なのは。
まずは体力から付けていくぞ」

なにをそんなに満足気に笑ってるの、この悪魔めっ！！！

「――お父さんも、お兄ちゃんも、みんなっ、だいっきらいだぁあああっ！！！！」

そんな私ができることと言ったら、そう叫んで逃げることだけだったのでした。

◆◆◆

「……なのはー、いい加減部屋から出てきなよー。
何がそんなに不満なの？
これは全部なのはのためになるんだから、がんばって行こうよー」

「あっちに行ってっ！！！
この悪魔二号っ！！！」

そうドア越しに姉に言い放つも、ドアの外の気配は立ち去る様子もなく、ただドンドンと叩いて出てくることを強要してくる。
私はもう、私室に篭城してやると心を決め、ドアに鍵をかけて頭から布団を被っている。

本当にどうしてこうなったんだろう……。
やっぱり、神様は私のことが憎いんだ……。

こんなにも人生の壁が多いと生きるのが辛すぎるよ……。

「なのはー」

「うるさいのっ」

ばんっとクッションをドアに叩きつけるも、消えてくれない。

「もう、終わったの。
この人生は終わりなの……」

そう呟いて、枕を涙で濡らす。
どうせなら、パティシエの訓練を死ぬ思いでやって死にたかったの……。

ちなみに。
この後、堪忍袋の緒が切れた姉君がドアを破壊して私を強制連行したことを、この日記に記す。
私はこの日から、剣術は覚えなくとも、護身術くらいは学ばなくてはいけなくなったようだ。
父はなにか勘違いしているし、兄や姉はなんか目が怖いし。

最後の良心である母君は……うん、私の（料理の腕の）育成プログラムを練っていて楽しそうだったの。

ふぇええ……。

二回目の躓きと逃走行為（後書き）

たぶん、次回は入学できるはず…。
フェレットが中々出てこない…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4491x/

オレの嫁？　うん、残念なことに今は自分

2011年10月25日02時05分発行